

それぞれの論文について議論を深めながら評価し、 最終審査に進む論文を決定しました



NRIグループ社員による1次審査の結果、16論文(大学生の部6、高校生の部10)が2次審査に進みました。2次審査では、NRI研究理事の桑津浩太郎をはじめとする社内審査委員に加え、特別審査委員の池上彰さん、最相葉月さんを含む7人の審査委員それぞれが16論文を評価しました。

2018年11月30日、NRI東京本社会議室にて審査委員が一堂に会し、論文審査会を開催しました。2時間に及ぶ議論を経て、上位入賞論文8作品(大学生の部3、高校生の部5)を選定しました。各賞については、2018年12月21日の最終審査会におけるプレゼンテーションで確定します。



【論文審査会 審査委員】

審査委員長

桑津 浩太郎 NRI研究理事

特別審査委員

池上 彰 ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

最相 葉月 ノンフィクションライター

審査委員

齊藤 義明 未来創発センター 2030年研究室 室長

八代 夕紀子 生産革新ソリューション開発一部 上級専門職

野呂 直子 コーポレートコミュニケーション部 部長

本田 健司 サステナビリティ推進室 室長

論文審査会レポート

NRI 学生小論文コンテスト2018
Share the Next Values!
2030年の未来社会を創るイノベーションとは
—世界に示す日本の底力!

2018年11月30日、審査委員7名がNRI東京本社会議室に集まり、論文審査を行いました。その議論の一部を紹介します。なお、各論文の応募者の情報（性別や学校名・学年など）は一切伏せられた状態で、審査は行われています。

大学生の部

日本の未来社会にとって必要な、 真のイノベーションを探求

[論文審査会 対象論文] *文中での呼称

- ・スマートヘルスケアモビリティ ~オーダーメイドAIが導く、幸せを創出する車~ *「スマートヘルスケア」
- ・「コーチング型教育」への教育イノベーション ~AI時代に必要な人材を学校教育で~ *「コーチング型教育」
- ・子育て支援・家事代行の担い手としてシニア力を活用
——子育て終了世代の余力を子育て世代に「ペイフォワード」 *「ペイフォワード」

※他にも3論文が審査されましたが、ここでは最終審査に進んだ作品について取り上げました。

上位3作品がそれぞれに高い評価を集める

桑津—最も高い評価だった作品は「スマートヘルスケア」で、次いで「コーチング型教育」「ペイフォワード」が高くなっています。いずれも評価に大きな差はありません。

「スマートヘルスケア」—実現可能性の高い、イノベティブなアイデア

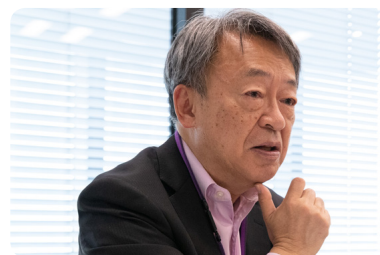
野呂—予防医療という観点からは、バイタルデータのモニタリングは既知の課題ですが、そこを日本の強みである自動車産業の成長と掛け合わせ、地方での自家用車の利用を加味した点が面白いと思いました。今はまだない、イノベティブな提案として、高く評価できると思います。現在のIoTの発展を考えると、2030年まで待たなくても実現可能な、リアリティある提案です。

池上—車を運転しながら健康を監視するシステムはユニークで、実現性も高く、面白いアイデアだと思います。特に人の命を預かる運転手、高速バスの運転手などには非常に良いと思います。

最相—運転手の身体の不調によるバス事故は、本当に多いですね。長距離運転手や宅配会社、タクシー、幼稚園の運転手、パイロットなど、職業として運転をする人にとって、とても良いアイデアです。



審査委員長 桑津 浩太郎



特別審査委員 池上 彰さん

八代—車のハンドルから生体データを取り出して予防医療に活用するというアイデアは、既にあるようですが、まだなかったのかと意外に思いました。技術的には2030年の未来ではなく、今すぐ実用化できそうです。効果を期待できる疾病の対象はもっと広げられると思いますし、生体データを機械学習で分析することで、更なる応用も期待できると思います。

齊藤—バイタルデータのモニタリングは、明らかに未来像としてやってくると思います。ウェアラブル型に比べて、コックピット型は高額化が予想されるので、価格差に見合う有用性を生み出すことができるのかが課題だと思います。また、市場化として、車への搭載が最適な戦略なのかどうかも考えるべきポイントだと思います。

本田—地方で車を使うことは日常だからセンサーにする、という発想は悪くないのですが、車でなくても良いような気もしました。しかし、考え方としてはよくまとまっている論文だと思います。

「コーチング型教育」—未来の人材育成にとって重要な問題提起

桑津—「コーチング型教育」についてはいかがでしょう。

齊藤—従来の日本の教育モデルとは違う形の、インタラクティブに個人の力を引き出していくコーチング型教育は、未来の日本の人材育成にとって重要な問題提起だと思います。問題意識が強く、観念論だけではなく実際にオランダで調査をし、有用なモデルを発見するという行動力も評価できます。ただ実際問題としては、日本の教育界から反発必至だと予想されるので、実現には極めて高いハードルがあると思います。何とか風穴を開けていってほしいと思います。

本田—「コーチング型教育」の必要性を示し、具体的な対策を分かりやすく記述しています。シンギュラリティ(技術的特異点:人工知能が発達して、人間の知性を超える段階)が到来する時代に向けて、確かに日本における教育改革は重要であり、それが真のイノベーションなのかもしれないと思い、高く評価しました。

野呂—「コーチング型教育」という、日本の義務教育には導入が難しそうな取り組みに取って立ち向かっている点を評価しました。資金を集めてオランダ教育の視察に行った積極性や行動力については、今後も期待できると思いました。実現するために必要な大学での教員教育の検討が、もう少し深掘りされていれば、さらに良かったと思います。

最相—クラウドファンディングで資金を集めて海外視察した行動力を、まず評価したいです。コーチングは大学ですでに当たり前に行われていますが、義務教育に導入することなののでしょうか。小学生の「個に合わせた教育」「個別最適化」の「個」とは何なのか、AI時代とはどんな時代か、時代錯誤や古い時代といった表現は具体的にどういうことを言っているのか、日本の教育にある数多くの優れた点とは何かなど、記述が大雑把である点は気になりました。



特別審査委員 最相 葉月 さん



審査委員 八代 夕紀子



審査委員 齊藤 義明



審査委員 野呂 直子

池上—実はもう既に、答えのない課題に取り組むアクティブ・ラーニングという方法が始まっていて、今、全国の先生たちが悪戦苦闘しているところなのです。そのため、私はこの提案にはイノベーションという観点から言えば、新しさはあまり感じませんでした。

特別審査委員2名がともに同じ作品を最も高く評価

「ペイフォワード」—実体験に基づく説得力と筆者の熱い思い

桑津—「ペイフォワード」は、特別審査委員の池上さんと最相さんが高く評価しています。

池上—自分を育ててくれた母と社会への感謝の念に裏打ちされた提案には説得力があり、筆者の熱い思いも感じられて、高く評価しました。イノベーションという観点ではそれほどユニークさはありませんが、子育てを終えたシニアの生きがいにもつながる良い提案だと思いました。

最相—昔は当たり前だった「皆さんのおかげで大人になる」ことを、現代にふさわしい形で再生すると、こうなるのかと思いました。地域センターのカフェや図書館で情報交換したり、勉強会を開いて学習したりするシニアや親子の姿が想像できます。本人の成し遂げたい未来像も明確に記述されています。地縁による助け合いがなくなった時代に、子供の心のケアや、働く親を支えることにもつながるのではないかという期待を込めて、評価しました。また、「ペイフォワード」というネーミングや「メンター制度」「名もなき家事」など、キャッチーなフレーズをうまく使いこなしている点も良いと思いました。

齊藤—子育てと仕事の両立に関する社会システムの転換やビジネスチャンスは、日本の未来に確実に起こることだと思います。ただ、既に民間事業者によるサービスが存在するので、料金設定や質の担保の問題、公的負担の設定などまで踏み込んで書かないと、その質を判断できないと思いました。

八代—私は論文をイノベーションという面を重視して評価しているのですが、「ペイフォワード」にはそういった面を強く感じなかったため、相対的にあまり高く評価できませんでした。

野呂—20年ほど前に私自身も子育てをしながら仕事をしていましたが、当時はまだ今のよう保育サービスはありませんでした。一方、地域での住民同士の支え合いはあり、子育てを終えた50代60代の方が自宅で子供を預かってくださるシステムを利用し、しつけの面でもとても良かったと感謝しています。「ペイフォワード」は実体験に基づいた説得力や文章力もあり評価できますが、今までにはない新しいアイデアも欲しいと思いました。



審査委員 本田 健司



*

桑津—「スマートヘルスケア」「ペイフォワード」「コーチング型教育」の3作品について、最終審査に進めるかどうかについて話し合いたいと思います。

池上—「スマートヘルスケア」に対する評価は、どの審査委員もおしなべて高くなっていますよね。

桑津—では、相対的に最も評価が高い「スマートヘルスケア」については、最終審査に進めることとしてよろしいでしょうか？

一同—はい。

桑津—「ペイフォワード」と「コーチング型教育」についてはどうですか。

齊藤—「ペイフォワード」は、池上さんと最相さん、お二人とも1位に評価しています。

最相—この作品は最終審査に進めて問題ないのではないのでしょうか。

池上—そうですね。

桑津—では特別審査委員のお二人が推す「ペイフォワード」も、最終審査に進めることとしたいと思います。

池上—「コーチング型教育」は、評価が分散していますね。

野呂—最終審査でプレゼンテーション力を見てみたいと思いました。

桑津—「コーチング型教育」は評価が分かれています、1位につけている審査委員の方もいらっしゃいますので、最終選考に進めることに異論はないと思います。それでは、大学生の部の最終審査対象作品は、「スマートヘルスケア」「コーチング型教育」「ペイフォワード」に決定します。最終的な賞の確定は、12月21日のプレゼンテーション審査を経て決定します。



高校生の部

幅広いテーマから イノベーションを考える作品が揃う

[論文審査会 対象論文] *文中での呼称

- ・「**お金**」に名前を書く—生きることと学ぶことをつなげる *「**お金に名前を書く**」
- ・**日本が誇る最強繊維** *「**最強繊維**」
- ・「**マナビ介護**」による介護うつへの減少は可能か。 *「**マナビ介護**」
- ・**根室とロシアの合同大学設立に向けて** *「**根室とロシア**」
- ・「**はじまりの村**」が作る循環型社会 *「**はじまりの村**」

※他にも5論文が審査されましたが、ここでは最終審査に進んだ作品について取り上げました。

評価が集まった上位3作品

桑津—特に評価が高かったのは、「お金に名前を書く」「最強繊維」「マナビ介護」で、これらの評価にはほとんど差はありません。次いで、「はじまりの村」と「根室とロシア」も高くなっています。

「お金に名前を書く」—斬新なアイデア、他にはない発想の転換

最相—お金に名前を書くことが社会の変化に即した学びになるという斬新なアイデアで、この論文には他にはない発想の転換を感じました。お金に名前を書くと、お金が動けば次の展開が目に見えるようになるわけで、例えば寄付金はどう動いているか寄付する側として知りたいですし、社会実験としても興味深いと思います。

池上—「お金に名前を書く」は面白いアイデアですが、現実問題としては自分が何にお金を使ったかを知られることへの懸念もあるので、実現性の点で少し疑問を感じました。

野呂—サブタイトルにあるように、「生きることと学ぶことにつなげる」という哲学的で深い考えを持ちながら、その解決策として、お金に名前を書いて、どう流れていくのかトレースするという提案が非常にユニークだと思いました。

本田—変わりゆく現代社会の価値観に対して、学校教育が矛盾した空間であるという鋭い指摘から始まっていて、引き込まれました。お金のトレーサビリティを取得するという大胆な発想に驚かされました。



審査委員長 桑津 浩太郎



特別審査委員 最相 葉月 さん

齊藤—仮想通貨の中で超透明度の高いものの1つの形だと捉えれば、リアリティのある提案です。また、文章力の高さを感じましたが、参考文献の記述がないので、ぜひプレゼンテーションを聞いてみたいと思いました。

「マナビ介護」—高齢化社会における介護うつという課題への挑戦

桑津—「マナビ介護」は、評価が分かれています。

齊藤—この論文は高齢者社会における介護うつという重大な問題に挑み、その課題を的確に捉えています。高校生が介護を学べば、人材の育成としても、介護うつに悩んでいる介護者にとっても、良い効果が得られるという人間的な着眼が優れていると思いました。

最相—この筆者が言っているのは、介護を国民全体の基本知識にするということだと捉えることができます。それをどう運用していくかということから出発したアイデアだと思うので、そのあたりを筆者自身がしっかりと考えているかどうか、最終審査で聞いてみたいですね。

野呂—高齢化という社会問題を、若者による介護という新しい考えで捉えている点に、日本の未来はまだまだ明るいという思いを持ちました。

八代—私はどの論文もイノベーションという観点から評価しましたが、「マナビ介護」にはあまり未来感を感じられず、もう一声、新しいアイデアが欲しかったところです。

池上—高校生が介護うつに対して問題意識を持っていることは素晴らしいと思う一方で、高校で「マナビ介護」をやって、本当に介護者の介護うつを防げるのか、という根本的な疑問も感じました。

「最強繊維」—ユニークな発想と、「日本の底力」というテーマへの合致

池上—最新の技術で自動車を外側から守ろうというアイデアがユニークで、実現可能性も感じます。

野呂—車の外側にエアバッグが出るというアイデアが、大人にはない、高校生らしい発想で面白いと思いました。

最相—私は論文に書かれているクモの巣繊維を取材したことがあるのですが、この論文はあくまでもその素材によってどんなことができるのか、応用可能性を論じたものであり、あまりオリジナリティや斬新さは感じられませんでした。

桑津—かつて日本が強かった繊維を改めて見直すという観点では評価しましたが、クモの巣繊維の可能性に乗っていることから、相対的に少し評価が下がりました。

本田—「最強繊維」は「日本の底力」というテーマに合っていると思います。サステナビリティという観点からも、石油を使わないエコ素材という点を評価したいですね。



特別審査委員 池上 彰さん



審査委員 齊藤 義明



審査委員 八代 夕紀子

桑津—ここまでの議論で、まず「お金に名前を書く」を最終審査に進めることには異論はないと思います。「マナビ介護」は評価も高く、筆者の想いを直接聞いてみたいという意見もあります。「最強繊維」はクモの巣繊維の可能性に乗っているのではという意見もありますが、「日本の底力」というテーマには非常に合致しています。「マナビ介護」と「最強繊維」についても、最終審査に進めるということではいかがでしょうか。

一同—賛成です。

特別審査委員が推す2作品も最終審査へ

桑津—次いで評価の高かった「はじまりの村」と「根室とロシア」についてはいかがでしょうか。

「根室とロシア」—日露関係改善への強い想いから生まれる説得力

八代—一気に読ませる論展開ながら、個々のパーツは大変ロジカルでよく整理され、根室の抱える課題を丁寧に拾っています。ロシアとの関係を少しずつ動かしていくのだという情熱、というより執念を感じ、アイデアそのものより高い説得力を評価しました。

池上—北方領土問題の交渉が注目されている中、具体的で実現可能性の高い提案です。ロシアとの関係改善に資する可能性があり、評価できると思いました。

本田—根室の地方創生のために、ロシアとの合同大学設立という大胆な発想が良いと思います。根室の地から若い人が高校卒業とともに離れてしまうという課題に対して、大学を作るという発想は的を得ていると思います。根室の地を何とかしたいという強い想いも感じました。

「はじまりの村」—マイナスをプラスに変える、未来志向の提案

最相—「暗い社会」というひと言から書き出していますが、廃村放置の土地を「はじまりの村」と名付けて、企業や個人の有志が集まってゼロから村を作ろうという提案に目を開かされました。私はこの提案を、未来志向で非常にポジティブなものだと捉えました。「土地の自己肯定感」という言葉も良いと思います。

八代—今回の論文の中で、特に「はじまりの村」にはエネルギーで明るい印象を持ちました。マイナスをプラスに変えて前向きに進化しようとする情熱とユニークな発想のバランスを、高く評価したいと思います。過疎の村にもう一度エネルギーを集めて活性化するという、新しい土地に対する期待感をあおられました。

桑津—「根室とロシア」と「はじまりの村」は、特別審査委員のお二人の評価も高く、最終審査に進めて、プレゼンテーションを聞いてみたいと思いますが、いかがでしょうか。

一同—賛成です。



審査委員 野呂 直子



審査委員 本田 健司



*

齊藤—どの論文も、非常に勉強して書かれているという印象を持ちましたが、一方で、本当に自分のアイデアなのか、たまたま何かその分野の本を読んで、書かれていることを作文し直しているということはないか、という点は気になりました。

桑津—そういった点が気になった審査委員は複数いるようなので、最終審査では、本当に筆者自身が考えて作った内容なのかという点を重視して、プレゼンテーションを見た上で質問等で確認することにしたと思います。

それでは、高校生の部の最終審査対象作品は、「お金に名前を書く」「最強繊維」「マナビ介護」「根室とロシア」「はじまりの村」とします。最終的な賞の確定は、12月21日のプレゼンテーション審査を経て決定します。





審査委員長

桑津 浩太郎 NRI 研究理事

今回は「2030年の未来社会を創るイノベーションとは—世界に示す日本の底力!」というテーマを設定し、大学生や高校生の皆さんが、どんな日本や世界の新しい時代を切り拓くイノベーションを提示してくれるのか、期待感をもって論文審査にあたりました。大学生・高校生ともに、少子高齢化、医療、教育など、目下の社会課題から幅広いテーマを取り上げた提案が揃い、大変読み応えがありました。

ただ、応募作品を読んで気になったのは、関連する分野の本やウェブサイトの内容やアイデアをなぞらえているのではない、その人自身のオリジナルなアイデアなのかどうかという点です。最終審査では、その点に焦点を当てて質疑を行い、最終的な賞を決定することを、審査委員全員で確認しました。



特別審査委員

池上 彰さん ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

大学生の論文は、例年より幅広いテーマが見られ、力作が多く、大変読み応えがありました。

また、大学生・高校生ともに、総じて論文の文章力が高く、筆力の向上が感じられました。特に高校生は、このコンテストが始まった頃と比べると、しっかりと論文の形を成した作品が多くなってきています。一方で、論文のテクニク的なものが先行して、新たな課題発見、発想の斬新さについては、どこかごんまりとまとまってしまって、今一つもの足りない印象がありました。

大学生は、ある程度まとまった論文の形になるのは仕方がないと思いますが、高校生には実現可能性に関係なく、破天荒なくらい、夢を語る姿勢が欲しいと感じています。



特別審査委員

最相 葉月さん ノンフィクションライター

毎年、少子高齢化、医療、教育などの社会課題からの提案が多く見られますが、2030年が近づいていよいよ緊迫感が増してきたのか、アイデアはより具体的で、実現性の高いものが増えた印象があります。特に、高齢化社会を支えていくことへの重圧感が年々増大していることを、今回は強く感じました。

高校生は、少子高齢化、過疎、エネルギー問題から北方領土などのトピックスまで、幅広い問題への目配りがされていて、頼もしく思いました。ただ、審査の傾向と対策をやり過ぎなのか、突出したアイデアは少ないと思います。また、大学生・高校生ともに、学校での学びと実社会で生きることの乖離が大きくなっていて、そのことへの不満や危機感が、そこそこに顔をのぞかせていることが気になりました。

審査委員

齊藤 義明 未来創発センター 2030年研究室 室長

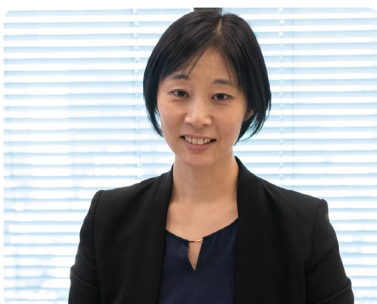


私は提案されているアイデアを、「ウオント」「クレイジー」「リアリティ」という観点から評価しました。そのアイデアが、社会のニーズではなくて、その人自身のウオント、いわば当事者意識や原体験のようなものからスタートしているのかどうか。また、そのアイデアがクレイジーなものかどうか、かつリアリティのあるものかどうかという点です。その観点から大学生や高校生の提案を見ると、やはり「クレイジー」の度合いが総じて足りない、と感じました。

また、どの作品に対しても、本当にその人自身のアイデアなのか、本に書かれていることを作文し直しているのではないか、ということが気になりました。

審査委員

八代 夕紀子 生産革新ソリューション開発一部 上級専門職



今回初めて審査に参加しましたが、高校生・大学生ともに筆力が非常に高いことに純粋に感心しました。評価においては、イノベーションと言える提案かという面を重視して行いましたが、大学生の論文には、発想の斬新さが総じて足りないように感じました。「2030年の未来社会」ではなく2020～2025年くらいの印象を持ち、未来感が不足していたのが残念です。

高校生の論文は、突飛なアイデアや展開があるものに心くすぐられ、何に重きを置いて評価すべきか迷いました。特に高校生は生まれ育った環境などのバックグラウンドがテーマ選定にダイレクトに影響するのか、なぜそのテーマを選んだのかという経緯にも興味を持ちました。

審査委員

野呂 直子 コーポレートコミュニケーション部 部長



今はない新しい発想かどうかという、イノベティブの観点から評価しました。大学生の論文は、高齢化、医療、教育などの社会課題から幅広くテーマを取り上げた作品が揃い、読み応えがありました。しかし、独自の視点での新たな課題発見をしているかという面では、若干物足りなさを感じました。

高校生の論文は、どんな課題を探し、それをどう解決していこうとしているのか、毎年楽しみにしています。今回は論文としての体裁が整った作品が多く、破天荒ともとれるとんがった論文が減り、残念に思いました。もっと自由な発想で日本の未来を考える、そんな小論文コンテストでありたいという思いを持ちました。

審査委員

本田 健司 サステナビリティ推進室 室長



大学生の部は昨年に比べて応募数は減りましたが、作品のレベルは遜色ないと思いました。高校生の論文は、昨年に比べ、発想に大胆さがあるものが多く、大変興味深く読めました。大学生も高校生も、全体的に論文としての体裁が整っている作品が多く、その点は素晴らしいのですが、粗削りで体裁も整っていないけれど発想が素晴らしい論文が埋もれている可能性があるのではないかと気になりました。

また、取り上げるテーマについては、高齢化や介護の問題など国内の問題にどうしても目が向いてしまう傾向が強いので、もう少しグローバルな視点を大切にしてほしいと思います。

それぞれの候補者が考えた、「2030年の未来社会を創るイノベーション」をプレゼン



2018年12月21日、東京・大手町のNRI東京本社大会議室において、「NRI 学生小論文コンテスト2018」の最終審査会が行われました。最終審査会では、論文審査を通過した8論文（大学生の部3、高校生の部5）の執筆者がプレゼンテーション審査に臨みました。

最終審査会の開始にあたってNRI代表取締役社長の此本臣吾が挨拶し、「1,444の応募作品の中から最終審査に残った8作品のプレゼンテーションを大変楽しみにしています。ぜひいつも通りの言葉で、思いのたけを話してください」と述べました。



[最終審査会 審査委員]

審査委員長

桑津 浩太郎 NRI 研究理事

特別審査委員

池上 彰 ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

最相 葉月 ノンフィクションライター

梅野 修 共同通信社 常務理事

審査委員

此本 臣吾

白見 好生

横山 賢次

齊藤 義明

八代 夕紀子

NRI代表取締役社長

NRI代表取締役専務執行役員

NRI常務執行役員

未来創発センター 2030年研究室 室長

生産革新ソリューション開発一部 上級専門職

最終審査会レポート

NRI 学生小論文コンテスト2018
Share the Next Values!
2030年の未来社会を創るイノベーションとは
—世界に示す日本の底力!

2018年12月21日に東京・大手町のNRI東京本社において行われた最終審査会「プレゼンテーション審査」の様子をレポートします。
(氏名の五十音順にプレゼン。プレゼン時間6分、質疑応答3分)

高校生の部

根室とロシアの合同大学設立に向けて

岸本 万尋 立命館慶祥高等学校3年

プレゼン動画はこちら <https://youtu.be/xahjENc-MUs>



北方領土問題の改善と根室の地方創生とのために、高等教育機関のない根室に日本初の日本・ロシアの合同大学を設立し、日露をつなぐパイプとなる人材を継続的に生み出すことを提案。明瞭で落ち着いた語り口によるプレゼンテーションからは、根室の地を何とかしたい、解決への道筋を日露両国が共に拓いていくのだ、という強い思いが伝わり、提案の説得力を高めました。

審査委員との質疑応答

Q —そもそも、なぜ北方領土に興味を持ったのですか。

A —私は中学生の時から弁論研究部に所属しており、尊敬する先輩が北方領土の研究をしていました。そのこともあり、北方領土についての話を聞いたり、実際に出向いて話を聞く機会もあり、「私が住んでいる北海道にこんなにも近いのになぜ?」という気持ちが強くなり、北方領土に興味を持つようになりました。

Q —北方領土と言うとどうしても政治問題が関係してきますが、この大学で学ぶロシア側の人たちは、もしかしたら自分が住んでいる所が自分の国ではなくなるかもしれないという状況の中で学ぶわけですよね。それについてはどう考えますか。

A —現在、例えばビザなし交流ではロシア側が主導権を握っており、日本側もロシアとの間に大きな壁を感じています。そういった壁は日本もロシアも同じものだと思うので、教育という面で何とか打ち破っていかないと考えています。



日本が誇る最強繊維

清田 彩加 中央大学高等学校3年

プレゼン動画はこちら https://youtu.be/oidf_VXwxRo



自動車事故による被害を最小限に抑えたいという思いから、最強の強度を持つ新繊維である人工クモ糸に着目し、車外に取り付ける「クモの巣エアバッグ」を提案。歩行者を守ると共に、車自体も包み込むことで、後部座席に座る人や車自体の損傷を守り、人命も財産も守ることができると強調しました。着想を表現したイメージ画はユニークで、日本の底力によって実現できるはずだという主張が期待感を高めました。

審査委員との質疑応答

Q —クモの巣繊維との出会いは、どういうところからだったのですか。

A —私は以前から車の助手席に乗るのが得意ではなくて、いつも後部座席に乗っています。助手席と運転席はエアバッグで守られていますが、後部座席にはないので、テレビのニュースなどで衝突事故の映像を見ると「後部座席は怖いな」と思うことがよくありました。今回、コンテストに応募するために日本が誇れる技術を調べていたら、クモの巣繊維というものを見つけ、それを見た瞬間に「スパイダーマンみたいにクモの巣を発射したら面白いのではないか」とアイデアが浮かびました。

Q —後部座席を守るということですが、クモの巣エアバッグは歩行者を守るため、前方で発射するわけですよね。どんなメカニズムで後部座席の人を守るのですか。

A —前方に発射すると同時に、後方に向かって車全体を包み込むように発射することで車全体を守り、後部座席に座っている人を守ります。また、車は高価であるため事故で車が壊れてしまうのは持ち主にとって辛いことだと思って、車自体が安全に守られることは良いのではないかと考えて、アイデアを考えました。



「お金」に名前を書く——生きることと学ぶことをつなげる

佐藤 拓海 明秀学園日立高等学校2年

プレゼン動画はこちら <https://youtu.be/WQFI8s2NsGA>



「何のために勉強するのか。生きる力とはお金を稼ぐことなのか。なぜ生きることと学ぶことには大きな差があるのか」という問題意識から、生きることを学ぶことに近づけ、多様な価値観が響きあう社会を実現するために「お金に名前を書く」ことを提案。地域通貨と仮想通貨のしくみを用いることで、地域社会の在り方も自然で持続可能なものに変えていけると主張しました。そのユニークなアイデアに、会場は引き込まれました。

審査委員との質疑応答

Q — お金に名前を書くことで、個人のお金の使い方が知られてしまうことになってしまいますが、プライバシーの問題についてはどのように考えていますか。

A — 確かにプライバシーの問題は重要なので、お金の使い方を知られたくない場合には、匿名性を守る方式を用いるなどの方法でプライバシーを守りたいと考えています。

Q — プレゼンテーションの内容は、今でもやろうと思えばできますよね。2030年に向けた取り組みという観点から考えると、何がこの提案の新しい部分になりますか。

A — 現在、これからの時代に向けて政府が仮想通貨を進めていることもあり、今後こういった制度がやりやすくなると共に、人々の抵抗感も薄まると思います。そういう意味で、2030年には必ず実用化できると考えて、未来への提案としてこのアイデアを提示しました。

Q — 実際に地域通貨だと、いわゆる物体という形での取引になるのか、あるいは仮想通貨というバーチャルなものになりますよね。そこは具体的にどのように考えていますか。例えばsuicaには使用履歴が入っていますが、あれとバーチャルな仮想通貨をつなげた、そんなイメージですか。

A — はい、近いものになると思います。地域で物をやり取りする際に、仮想通貨としての物体をお金として利用し、そのお金に名前が書いてあるということを考えています。



「はじまりの村」が作る循環型社会

長谷川 その香 宮城県宮城野高等学校2年

プレゼン動画はこちら <https://youtu.be/unSroYn-8R8>



「未来社会がもっと幸せであふれていたらいい」という思いから、循環型社会を作り出せば終わらない未来社会になることを着想。廃村放置の山村や漁村を「はじまりの村」と名づけて、再生可能エネルギーによって循環型社会を作り、有志の個人や企業がゼロからまち作りを行うことを提案しました。「幸せの選択肢を増やしたい、そのために、はじまりの村が作る循環型社会に住むという選択肢を作りたい」と丁寧な言葉を重ねて主張し、未来志向の提案実現への期待感を高めました。

審査委員との質疑応答

Q — 「はじまりの村」は、皆が行きたいと思うかどうかが大事だと思いますが、どうしたらそう思うでしょうか。また、ご自身はいかがですか。

A — 論文にはウェブに公表するというを書きましたが、それ以外はまだまだ深く考えていませんでした。自分としては、体調を崩して学校を休んでいたとき、忙しかった生活では得られないような気付きを与えてくれる自然の豊かさや人の温かさに触れることができたので、「はじまりの村」にはぜひ住みたいと思います。

Q — 「はじまりの村」として、イメージされている風景があると思うのですが、そこに一番近い地域はありますか。

A — 亡くなった曾祖父母の家が山形にあるのですが、シャッター街が多かったり、周りに畑があったりして、その場所で小規模水力発電ができるなどか、たくさん雪が降るので雪氷熱エネルギーを使えるかな、というイメージは持っていました。

Q — 明治維新の廃藩置県後の人口順位を見ると、石川や福井のあたりが東京よりも多く、その後、工業化によって都心部に人口が移ったことがわかります。ですから、50年100年単位で考えれば、消滅の可能性がある地域では同じことが起きると思います。そう思うと、この提案は非現実的なものではないですし、魅力があれば可能だと思います。

A — 私も「はじまりの村」を作りたいと思います。



「マナビ介護」による介護うつへの減少は可能か。

松賀 翔佑 立命館慶祥高等学校3年

プレゼン動画はこちら <https://youtu.be/3h80bvXH-4I>



介護うつへの減少と、これからの高齢社会を生きる学生が介護を学ぶことを目的として、高校生が授業の一環として在宅介護をしている家庭に赴き、介護を手伝うプロジェクト「マナビ介護」を提案。これによって、若者にとっては将来のつらい介護に負けないための、介護うつを予防する実践的な学びができ、介護者にとっては身体的負担だけでなく精神的負担を減少して、介護うつを軽減することができる、と訴えました。介護にまつわるデータを効果的に引用した丁寧なプレゼンテーションによって、提案の説得力や納得感を高めました。

審査委員との質疑応答

Q —そもそも、なぜ介護うつへの問題を取り上げようと思ったのですか。そして、なぜこういうアイデアを思いついたのか、教えてください。

A —私の叔母が祖母の介護をずっとしていて、介護うつのような状態になってしまったことがあります。それを見て「自分が母の介護をする時はどうなるのだろう」と想像してみたのですが、自分が介護をする姿を想像できませんでした。それは、今、日本の学校では介護を学ぶ機会が本当に少ないためだからだと思います。それで「若者が介護に手も足も出ないような状況にならないようなシステムを作ったら、きっと2030年には介護に強い若者が生まれるかな」と思って考えました。

Q —コンテストのテーマの中に「世界に示す日本の底力!」とありますが、“日本ならではの”ということで、このテーマを取り上げたきっかけと教えてください、意味を教えてください。

A —私は日本が、ヤングケアラーなどの問題を研究しているイギリスよりも、さらに発展した介護に強い国になればいいなと思っています。実際に、地域包括支援センターにインタビューに行ったとき「介護について相談できる場所があることを、知らない介護者が沢山いる」という話を聞いたので、私の提案によって、介護に困ったら頼れる存在があるということを日本の同世代の若者に気づいてもらえたらと思っています。



子育て支援・家事代行の担い手としてシニア力を活用

—子育て終了世代の余力を子育て世代に『ペイフォワード』

岩間 優 東京医科大学 医学部医学科6年

プレゼン動画はこちら <https://youtu.be/HvcTzLEjqdA>



他人から受けた親切を別の人への新しい親切でつないでいく“ペイフォワード”。子育てを終了したシニア世代の力を子育て世代の子育て支援・家事代行にペイフォワードするマッチングシステムを提案。安心・安全な場所として共用ホームの確保や、シニア人材の育成のしくみといったアイデアも提示しました。2030年の未来社会には世代間共生で連帯社会を実現することが重要であると主張し、医学生として育児と仕事が両立できる社会になっていることを望む強い想いが伝わりました。

審査委員との質疑応答

Q —この提案では、見ず知らずの人の家庭に入ることになるので、何らかの形で信頼性を担保する必要があると思うのですが、この点はどのように考えていますか。

A —このシステムでは、自治体を仲介することで安全性を担保したいと考えています。例えば、自治体が提供会員に向けて講習会を開くとか、お互いに顔合わせの時点では自治体のアドバイザーが仲介して、取り決めなどを確認するといったことを考えています。

Q —私には4歳の孫がいますが、一日一緒にいると体力的にきつくて、精魂尽き果てます。自分の孫でもそうなので、ひと様の子を預かるのはシニアには相当大変だと思うのですが、いかがですか。

A —確かに子供の面倒を見るのは体力の要ることだと思います。短時間ならできるといった場合もあると思うので、多数の人の力を融合させる方法を取るなど、色々な方法があることを皆さんに知ってもらうことが大事だと思います。

Q —マッチングシステムを作るということなので、対応するシニアの体力と預かる子供のバランスというものをうまくマッチングさせられればいいですね。

A —はい。それぞれの要望を詳しく聞くことが大切だと思います。



「コーチング型教育」への教育イノベーション

～AI時代に必要な人材を学校教育で～

越智 達也 北海道教育大学 札幌校 教育学部 4年

プレゼン動画はこちら <https://youtu.be/CXG2Pwx6nFY>



「誰もが目的感を持った世界を創りたい」という想いをベースに、個の考えや気づきを引き出し、伸ばし育てる「コーチング型教育」への教育イノベーションを主張。資金調達をして実行したオランダへの教育視察をもとに、年齢や学年の概念がない個別化された学びや、協働する場としての学校の在り方、コーチング型の教員養成などを提案しました。工夫を凝らしたプレゼン画像と明快な語り口から、コーチング型教育への強い想いが伝わりました。

審査委員との質疑応答

Q—今、学校の現場ではアクティブ・ラーニングというものが言われていますが、それとコーチング型教育は共通している点があるのでしょうか、それとも違うのでしょうか。

A—アクティブ・ラーニングは2020年に向けて行われていますが、まだ最初の宣言に過ぎず、ここから日本の学びの常識が大きく変わっていき、コーチング型教育はアクティブ・ラーニングのその先にあるものだと考えています。今のアクティブ・ラーニングは、答えがあるようなものにも話し合いで出来合いの答えを見つけるような状況になってしまっていると思うので、そうではなく、正解のない問題や正解が多様にある問題を話し合っ、グループで最適解をいかに見つけ出していくかというところを、自分は目指しています。

Q—現状の教える側である先生たちの方法やスキルから、提案されている方法に転換するには、おそらく先生そのものの質も変わっていかねばならないと思いますが、そのあたりの転換をどういう方法でやっていこうと思いますか。

A—先生の質の転換には、一つはコーチング型教育によってこれから教員になっていく人材を育てて、教育界に送り出していくこと。すでにいる教員には、学び直しのリカレント教育などをつなげることで、みんながコーチング型アプローチによって教育を行える世界になればと思っています。



スマートヘルスケアモビリティ

～オーダーメイドAIが導く、幸せを創出する車～

須井 翼 早稲田大学 創造理工学部4年

プレゼン動画はこちら <https://youtu.be/KnrFjYTvEPg>



日本の未来のためには、予防医療の観点から心疾患や脳血管疾患などの発作性疾患を早期発見・治療し、健康寿命を延ばすことが重要であるという想いを出发点に、日常的・長期的に生体データをモニタリングするIoTデバイスを車のハンドルに搭載した、スマートヘルスケアモビリティシステムを提案。無意識に健康が維持でき、幸せを創出する未来の車になると主張しました。実際にハンドルに電極を装着して心電を計測する動画によって、提案への納得感と実現への期待感を高めました。

審査委員との質疑応答

Q — 今これはどの位の時間、継続して乗ってれば、計測されるのですか。

A — 私の測定システムでは10秒間で1測定を行うので、最低10秒間だけハンドルを握ってれば測定できます。現在は病院と提携して様々なデータを集めている段階なのですが、一般的な波形と比較して、疾患かどうかを判定するシステムにしています。

Q — そもそも、ハンドルと心疾患を結びつけようと思った動機は、どういうことだったのですか。また、実用化のめどについては、どのように考えていますか。

A — 私は、日常に非侵襲な測定ということに重点を置いているので、ウェアラブル端末で心電を測定できるようなものは、測定者にその機具を装着することを強要することになります。そういうことではない状態で、乗るだけで生体信号が計測できるという面で、ハンドルを考えました。心電を計測する際には、どこでも良いのですが2点の皮膚接触が必要なので、素肌が出ている時間が長い両手でハンドルを握る方法を選びました。実用化のスピードについては、私の研究のスピード次第になってしまう部分があるのですが、私は博士課程までこの研究でやっていこうと思っているので、5年位で形にして、医療面の審査を通してとなると、5年後からスタートして、ちょうど2030年頃には普及をし、高齢化社会に対する一つの対抗策、解決策にしていきたいと考えています。



最終審査結果および評価のポイント

NRI学生小論文コンテスト2018
Share the Next Values!
2030年の未来社会を創るイノベーションとは
—世界に示す日本の底力!

「2030年の未来社会を創るイノベーションとは—世界に示す日本の底力!」をテーマとして開催された「NRI学生小論文コンテスト2018」は、大学生の部3作品、高校生の部5作品の計8作品が最終審査に進みました。

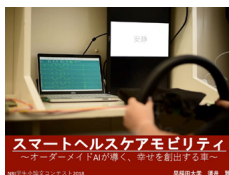
2018年12月21日の最終審査会において、筆者によるプレゼンテーションを実施し、厳正な審査を行った結果、以下のとおり受賞論文を決定しました。

大学生の部

大賞

スマートヘルスケアモビリティ ～オーダーメイドAIが導く、幸せを創出する車～

須井 翼 早稲田大学 創造理工学部4年



評価のポイント

日本の未来のためには、予防医療の観点から心疾患や脳血管疾患などの発作性疾患を早期発見・治療し、健康寿命を延ばすことが重要であるという想いを出発点に、日常的・長期的に生体データをモニタリングするIoTデバイスを車のハンドルに搭載した、スマートヘルスケアモビリティシステムを提案。

現在のIoTの発展を考慮すると2030年を待たずとも実用化が考えられ、そのリアリティある具体的提案が総合的に評価された。日本の強みである自動車産業の成長と掛け合わせ、地方での自家用車利用を加味した点も独創的である。運転に従事する人への活用や、期待できる疾患の広がりなど、展開力の高さに期待感を抱かされた。

優秀賞

「コーチング型教育」への教育イノベーション ～AI時代に必要な人材を学校教育で～

越智 達也 北海道教育大学 札幌校 教育学部4年



評価のポイント

AI時代が到来し、日本のさらなる未来への成長のために、真に必要な人材を育てる教育とは何か。画一的な教科指導や正解主義では、既存の枠組みにとらわれない行動力とチャレンジ精神あふれる人材は育たないのではないか。このような強い問題意識のもと、個を引き出し、伸ばし育てる「コーチング型教育」への教育イノベーションの必要性の訴える論調には説得力がある。

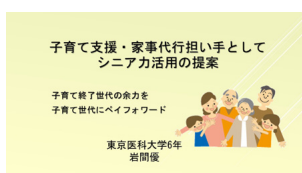
教科指導の個別最適化や、協働する場としての学校など、日本の義務教育への導入にはハードルが高い取り組みにあえて立ち向かい、問題提起している。クラウドファンディングで資金を調達し、オランダへの教育視察を実行した行動力も、評価を押し上げた。

特別審査委員賞

子育て支援・家事代行の担い手として シニア力を活用

—子育て終了世代の余力を子育て世代に『ペイフォワード』

岩間 優 東京医科大学 医学部医学科6年



評価のポイント

他人から受けた親切を別の人への新しい親切でつないでいく“ペイフォワード”。子育てを終了したシニア世代の力を子育て世代の子育て支援・家事代行にペイフォワードするマッチングシステムと、安心・安全な場所の確保という提案は、仕事をしながら自分を育ててくれた母や社会への感謝の念に裏打ちされ、説得力がある。医学生として自ら成し遂げたい未来像も明確に描かれ、筆者の強い想いが感じられる。

子育てと仕事の両立に関する社会システムの転換は、日本の未来の必至の課題であるとともに、シニアの生きがいや、働く親と子供のケアにつながる提案であるとして、高く評価された。

高校生の部

大賞

「お金」に名前を書く

—生きることと学ぶことをつなげる

佐藤 拓海 茨城県 明秀学園日立高等学校2年



評価のポイント

変わり行く現代社会の価値感に対して、「生きることと学ぶことが乖離している」という問題意識を提示。多様な価値観が響きあう世界を実現するために、「生きることと学ぶことをつなげる」という深い考えを、「お金に名前を書く」というシンプルながら斬新なアイデアに転換させている。他の論文には見られない大胆な発想の転換が、審査委員の評価を集めた。

お金に名前を書き、それがどう使われていくのかをトレースすることは、2030年には技術的に実現可能だろう。お金を使うことに注目すれば、次の行動が見えてきて、世界の見方は転換するはずであり、社会実験としても非常に興味深い。

優秀賞

日本が誇る最強繊維

清田 彩加 東京都 中央大学高等学校3年



評価のポイント

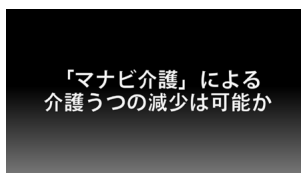
交通事故死をなくしたいという素朴な想いから出発して、最強の強度を持つ日本の新繊維に着目。車内ではなく車外に取り付けるエアバッグを開発するという、大人ではなかなか発想できないユニークなアイデアと、その着眼点が評価された。

「クモの巣エアバッグ」の実現可能性の高さに加え、車以外にもバイク、電車、飛行機、子供の遊具など、その汎用性は高い。石油を使わない低エネルギーの次世代素材であることも、サステナビリティという観点から注目に値する。「世界に示す日本の底力」というコンテストのテーマにも合致した提案で、素材の持つ可能性と日本の底力への期待感を強く感じさせられた。

優秀賞

「マナビ介護」による介護うつの減少は可能か。

松賀 翔佑 北海道 立命館慶祥高等学校3年



評価のポイント

介護うつの減少と、これからの高齢化社会を生きる学生が介護を学ぶことを目的として、高校生が授業の一環として在宅介護をしている家庭に赴き、介護を手伝うプロジェクト、「マナビ介護」を提案。この論文は、介護を国民全体の基本知識にすることが必要な時代が来ていることを提言していると捉えることができる。

高校生の視点から、2030年という近い将来へ向けて、喫緊の課題が提示されていることを、高く評価した。若者が在宅介護を手伝うことが、実は介護うつの緩和につながるのではないかとという人間的な着眼点も優れている。

高校生の部

特別審査委員賞

根室とロシアの合同大学設立に向けて

岸本 万尋 北海道 立命館慶祥高等学校3年



評価のポイント

根室の地方創生と北方領土問題の改善のために、高等教育機関のない根室に日本初の日本・ロシアの合同大学を設立することを提案。北方領土問題の交渉が注目されるなか、具体的で実現可能性も高く、ロシアとの関係改善にも資する可能性がある。

根室の地を何とかしたい、日露関係も徐々に動かしていくのだという筆者の強い想いに心動かされる。

ドラマチックな展開で一気に読ませながら、根室市が抱える多くの細かい課題を整理して丁寧に拾い上げており、その論展開が説得力を生んでいる。

特別審査委員賞

「はじまりの村」が作る循環型社会

長谷川 その香 宮城県宮城野高等学校2年



評価のポイント

廃村放置が決まった土地を「はじまりの村」と名づけ、再生可能エネルギー特区として日本の技術で循環型社会を作り、有志の個人や企業が集まってゼロからまち作りを行うという視点に驚かされた。地方の過疎化を進めてきたテクノロジーの進化が、更なる進化によって人々を地方へ呼び戻し、マイナーな田舎暮らしが最先端の暮らしへと変貌するという、マイナスをプラスに変えて前向きに進化させようとするエネルギーな情熱と、ユニークな発想のバランスが良い。「地方の自己肯定感を高める」という考え方も印象深い。ポジティブな明るさが感じられる論調と、背伸びをせず、丁寧な言葉でつづられた文章も審査委員の共感を集めた。

最終審査を終えて

NRI 学生小論文コンテスト2018
Share the Next Values!
2030年の未来社会を創るイノベーションとは
—世界に示す日本の底力!



審査委員長

桑津 浩太郎 NRI 研究理事

プレゼンテーションを拝見し、皆さんの熱い想いやその人にしかできないような表現を受け止めることができました。その後の最終審査では非常に審査が難航し、一部の評定については審査委員によって評価が真つ二つに分かれ、例年になく切迫した評価だったということをお伝えしておきます。

今回は「2030年の未来社会を創るイノベーションとは—世界に示す日本の底力!」という力強いテーマを設定したわけですが、現在の日本は、高齢化など、課題が山積した厳しい状況に直面しています。若い皆さんから様々なテーマが打ち出され、斬新な発想と強い意欲を示して頂き、逆境を突破する力となるような提案をして頂いたことは、NRIとしても非常にありがたいことだと思っています。

また、皆さんのプレゼンテーション力が向上していることも実感し、大変勉強になりました。



特別審査委員

池上 彰 さん ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

審査委員長から、今回の最終審査は例年になく議論が白熱した、という話がありました。多くの応募論文の中から論文審査で選ばれた人々だけが、この最終審査に集まってきたのですが、その上でプレゼンテーションをして頂くと、論文に書かれている思いと、多くの人を前に発表して表現する思いというものが微妙に異なっていたわけです。それをどう評価するかということで、最終審査では審査委員の評価が分かれ、大変審査が長引いたということです。

もちろん、皆さんのプレゼンテーションは見事であったし、一方で論文は論文として素晴らしいし、「さあ、それをどう評価するのか」ということで、審査が難航したと捉えていただければと思います。

受賞された皆さん、誠におめでとうございます。



特別審査委員

最相 葉月 さん ノンフィクションライター

2030年というのはそれほど遠い未来ではなく、ほんのすぐ10年先の未来なわけです。そのため、今回の全体の傾向としては、今ある問題がどうであって、それをどう考えるか、という切り口の論文が多かったような気がします。高齢化や介護関連の問題を取り上げた論文は今年も多く、受賞作品以外にも何本かありましたし、安楽死を取り上げた論文もありました。高齢者は働き、運動し、愛想よく振舞わねば社会的に評価されにくくなり、高齢になって孤独を楽しむことはリスクと見なされるのかと考えさせられました。

2030年には私自身は60代後半に差し掛かりますが、今から体を鍛えて、若い方たちに迷惑をかけないように元気な高齢者にならなければ、という思いを強くしました。この度は、受賞おめでとうございます。

表彰式

NRI 学生小論文コンテスト2018
Share the Next Values!
2030年の未来社会を創るイノベーションとは
—世界に示す日本の底力!

2018年12月21日、東京・大手町のNRI東京本社において、「NRI学生小論文コンテスト2018」の最終審査会に続いて表彰式が行われました。

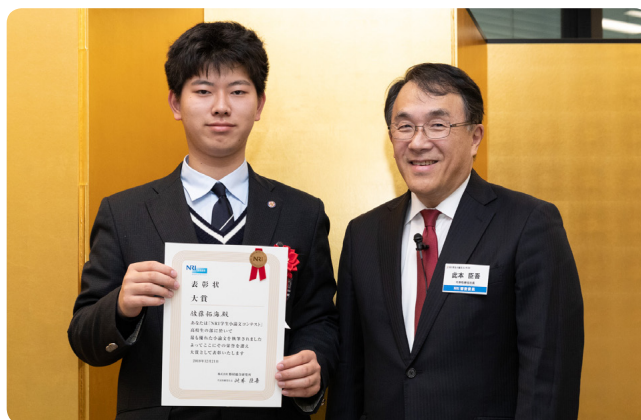
表彰式では、NRI代表取締役社長 此本臣吾が、8名の受賞者（大学生の部3名、高校生の部5名）の一人ひとりに表彰状と副賞を授与。会場全員が拍手を送り、受賞をたたえました。



晴れやかな表情の受賞者のみなさん、おめでとうございます！



大学生の部 大賞受賞の須井翼さん



高校生の部 大賞受賞の佐藤拓海さん

大学生の部 大賞



スマートヘルスケアモビリティ ～オーダーメイドAIが導く、幸せを創出する車～

須井 翼 さん 早稲田大学 創造理工学部4年

私の研究について、プレゼンテーションでは発表時間が短く、話し足りないことがたくさんあります。今日は自動運転の問題には触れませんでした。私は、車の自動運転化が進んでもハンドルがなくなることはないと考えています。それは、万が一事故が起こった際に、責任の所在は乗っている人に行くと考えた場合、ハンドルという存在がないと「人が車をコントロールする」という概念から外れてしまうからです。そのような理由で、私はハンドルを選んだわけです。

最終的な目標としては、国の法令でハンドル電極を義務化することで、スマートヘルスケアモビリティを世間に知ってもらえるようにしたいと考えています。現在はまだ模索中ですが、今後、ハンドル電極が世間に広まった時には、私の顔を思い出していただければ幸いです。

高校生の部 大賞



「お金」に名前を書く — 生きることと学ぶことをつなげる

佐藤 拓海 さん 明秀学園日立高等学校2年

この論文を書くことができたのは、友達や家族、先生方といったいろいろな人たちに尽力いただいたおかげであり、自分の力だけで受賞できたわけではないと思っています。まだまだ自分は学ぶことが多く、今回、これから学ぶべきことがたくさん見つかりました。本を読み直したり、改めて知識を習得し直したりといった面でも「まだ自分は成長できる」と感じて、今は少し興奮しています。

私は、成長することは生きる上でとても大事なことであって、学ぶということは生きるということと、とても近いことだと思っています。これが乖離しているから、お金に名前を書くということを論文に書いたわけです。やはり私としては、今後も学び続け、成長し続けたい、と思っています。

懇親会

NRI 学生小論文コンテスト2018
Share the Next Values!
2030年の未来社会を創るイノベーションとは
—世界に示す日本の底力!

2018年12月21日、最終審査会・表彰式の後、NRI東京本社29階のカフェスペースにおいて、懇親会が行われました。

受賞者、特別審査委員、NRI審査委員をはじめ、NRI役員・社員、これまでのコンテストの受賞OB・OGが集いました。論文の内容や進路について語り合ったり、記念撮影をして交流を温める光景があちこちで見られました。



審査委員、NRI社員らと懇談する受賞者たち



共同通信社 梅野さん NRI社長の此本と

特別審査員の池上さんと



特別審査員の最相さんと

メディアからの取材



受賞OB・OGも駆けつけて受賞者を祝い、交流を深めた



メディア掲載

NRI 学生小論文コンテスト2018
Share the Next Values!
2030年の未来社会を創るイノベーションとは
—世界に示す日本の底力!

「NRI 学生小論文コンテスト」は、毎回さまざまなメディアで取り上げて
いただいています。

【Web掲載 ニュース】

- ・共同通信
「大賞は茨城県の高校2年
野村総研の論文コンテスト」
- ・NewsPicks
- ・Yahoo ニュース
- ・goo ニュース
- ・BIGLOBE ニュース
- ・ライブドアニュース
- ・北海道新聞
- ・北日本新聞
- ・岩手日報
- ・福島民報
- ・上毛新聞
- ・千葉日報
- ・静岡新聞
- ・岐阜新聞
- ・北國新聞
- ・京都新聞
- ・山陰中央新報
- ・山陽新聞
- ・神戸新聞
- ・西日本新聞
- ・四国新聞
- ・徳島新聞
- ・愛媛新聞
- ・佐賀新聞
- ・宮崎日日新聞
- ・琉球新報

【Web掲載 その他】

- ・同志社大学ホームページ

【紙媒体 新聞】

- ・東京新聞
2018年12月22日 朝刊 7面
「大賞は茨城の高校2年生」
- ・上毛新聞
2019年2月6日 朝刊 19面
「浜田さん(県女大)奨励賞」
- ・高校生新聞
2019年1月号・3月号

【紙媒体 その他】

- ・東京医科大学 広報誌